



家庭教師のお姉さん

～蝉時雨の夏、二人きりの部屋で～

家庭教師のお姉さん（体験版）

蜜夜文庫

く 蟬時雨の夏、二人きりの部屋でく

蜜夜文庫

――
【体験版】 本作の冒頭（第1話・全文）を収録しています。
――

第二話 蟬時雨の午後

その夏は、朝からずっと蟬が鳴いていた。

六畳の勉強部屋は、エアコンをつけても隅のほうに熱がこもる。開けた窓から入ってくるのは、生ぬるい風と、途切れることのない蟬時雨だけだった。俺——桐谷遼、十九歳。この春に大学へ落ちて、二度目の受験に向かう浪人生だ。

机の上には、赤ペンで直された数学の問題集が広げてある。その隣に、麦茶の入ったグラス。氷が溶けて、外側にびっしりと水滴がついていた。

「遼くん、ここ。符号のミス、多いね」

声がして、俺は顔を上げた。

藤宮詩織先生。二十三歳。近所の国立大の大学院生で、週に二回、俺の家庭教師に来てくれている。白いブラウスに、膝の隠れる紺色のスカート。長い黒髪を、今日は暑いからと後ろでゆるくまとめている。うなじが、汗で少し湿っていた。

「……すみません」

「謝らなくていいの。わかってるのに焦って書くから、符号だけ落ちる。落ち着けば解ける子だよ、遼くんは」

詩織先生は、そう言って微笑む。丸い眼鏡の奥の目が、やさしく細くなる。

俺はその笑顔を、まともに見られなかった。

半年前、母がどこから連れてきた家庭教師。最初は「女の先生か」くらいにしか思っていなかった。けれど詩織先生は、俺が問題を解けたときに自分のことみたいに喜んで、間違えても決して責めなかった。落ちて腐っていた俺を、少しずつ机に向かわせてくれたのは、この人だった。

いつからか、俺は週に二回の火曜と金曜を、指折り数えて待つようになっていた。

初めて先生が家に来た日のことを、今でも覚えている。

春先の、まだ肌寒い夕方だった。志望校に落ちて、部屋に引きこもって、何もかもどうでもよくなっていた俺の前に、母が連れてきたのが、詩織先生だった。玄関で「はじめまして、藤宮です」と頭を下げた先生を見て、俺は正直、「若い女の先生に、何がわかるんだ」と思った。ふてくされて、まともに口も利かなかった。

それでも先生は、俺を怒らなかった。最初の授業で、先生は問題を解かせるでもなく、ただ、こう訊いた。

「遼くんは、どうして落ちたと思う？」

答えられなかった俺に、先生は言った。

「頭が悪いから、じゃないよ。私、遼くん答案、見せてもらったの。基礎は、ちゃんとできてる。ただ

——ここぞつてところで、自分を信じきれないだけ。それは、頭の良し悪しじゃない。ぜんぶ、これから直せることだよ」

その言葉が、なぜか、胸の奥に、すんと落ちた。

誰も、俺に「これから」なんて言ってくれなかった。落ちた、終わった、もう遅い。そういう言葉ばかりだった。なのに先生は、当たり前みたいに、俺の未来の話をした。

それから、俺は少しずつ、机に向かうようになった。先生に教わった問題が解けると、素直にうれしかった。先生が「ほら、できるじゃない」と笑ってくれると、その日一日、機嫌がよかった。

単純だと、自分でも思う。でも、それだけ、この人の存在は、俺の毎日を、あたたかく変えてしまっていた。

「今日、暑いね。エアコン、効いてる」

「あー……この部屋、古いんで。あんまり」

「そっか。じゃあ、これ」

先生は、持ってきた保冷バッグから、冷たいペットボトルのお茶を出して、俺の机に置いた。自分のぶんと、俺のぶん。いつもそうだ。この人は、いつも俺のことを、ひとつ多く考えてくれている。

「先生、いつもすみません」

「いいの。私が飲みたいだけだから」

そう言つて、先生は自分のペットボトルの蓋を開けて、こくり、と喉を鳴らした。白い喉が、上下する。まとめた髪からこぼれた後れ毛が、頬に貼りついてた。ブラウスの背中には、うっすらと汗がにじんで、白い生地、下着の線が透けている。俺は、見てはいけないものを見た気がして、視線を逸らした。

俺は、慌てて問題集に目を戻した。

こういうことが、最近、多い。

先生が身をかがめたとき、ペンを取ろうと手を伸ばしたとき、髪をかき上げたとき。何気ない仕草のひとつひとつに、いちいち、心臓が反応してしまう。前は、こんなじゃなかった。ただ、頼りになる、憧れの先生だった。それが、いつからか——女の人として、意識するように、なってしまった。

きつかけなんて、思い出せない。気づいたら、そうなっていた。

たぶん、まずいことだと思う。先生は、俺の家庭教師だ。仕事として、俺に勉強を教えに来ている。それを、こつちが勝手に、変な目で見るなんて。もし気づかれたら、先生は、二度と来てくれなくなるかもしれない。そう思うと、怖かった。

だから俺は、この気持ちを、ずっと、机の下に隠していた。

——たとえば、先週の授業のことだ。

俺がシャーペンを転がして、机の下に落としたとき。二人同時に、それを拾おうと手を伸ばした。狭い机の下で、先生の指と、俺の指が、ぶつかった。ほんの、一瞬だった。先生は「あ、ごめん」と笑って、何事もなかったみたいに、シャーペンを俺に渡した。

でも、俺は。

その日の夜、その一瞬のことを、何度も思い出していた。先生の指の、ひんやりとした感触。爪の、きれいな形。そんなことばかり、考えていた。自分でも、気持ち悪いと思う。たかが、指が触れただけで。

先生は、たぶん、覚えてすらいらない。俺にとつては特別な一秒が、先生にとつては、ただの偶然。その温度差が、苦しかった。

好きになつては、いけない人だ。

毎日、そう自分に言い聞かせている。言い聞かせるほど、その人のことばかり、考えてしまう。勉強に集中したいのに、参考書の余白に、無意識に、先生の名前を書きかけて、慌てて消したこともあった。

十九歳の夏。俺の頭のなかは、数式よりも、先生のこと、いっぱいだった。

——だめだ。集中しろ。

自分に言い聞かせて、シャーペンを握り直す。でも、隣に座った先生の体温を、腕のすぐそばに感じてしまつて、数字がぜんぜん頭に入つてこない。

先生の使っているシャンプーなのか、汗なのか、甘くて、少しだけ大人びた匂いがした。

先生の教え方は、不思議だった。

俺が問題で詰まると、答えを教えるんじゃないやなくて、「じゃあ、ここまでは、わかる」と、少しずつ、戻してくれる。そうやって、俺が「自分でわかつた」と思えるところまで、根気強く、付き合ってくれる。だから、先生に教わつた問題は、忘れなかつた。塾の講師みたいに、上から教え込むんじゃないやなくて、俺の隣に座つて、一緒に、山を登ってくれる感じ。

「遼くんはね、ほんととは、考える力がある子なの。ただ、途中で『どうせ無理だ』つて、諦めちゃうクセがあるだけ」

いつだったか、先生に、そう言われたことがある。

「そのクセさえ直れば、遼くんは、もつと、伸びる。だから私は、遼くんが諦めそうになったら、隣で、しつつく、背中を押すの。……ちよつと、うつとうしい」

「……いえ。むしろ、その」

うれしいです、と言いかけて、俺は、言葉を飲み込んだ。かわりに、「ありがたいです」と、当たり障りのないことを言った。先生は、「ならよかった」と、微笑んだ。

この人になら、頑張れる。この人の期待に、応えたい。そう思わせてくれる先生だった。

「次の大問、いっしょに解いてみようか」

「……はい」

先生が、俺のノートを覗き込むように、身を寄せてくる。白いブラウスの襟元が、ほんの少しだけ開いていて、鎖骨のくぼみが見えた。俺は視線の置き場に困って、シャーペンの先だけを見つめていた。

「ここだね、こっちの式を代入するの」

「あ……なるほど」

「わかった」

「わかりました」

先生の細い指が、ノートの上を滑る。爪は短く切りそろえられていて、透明のマニキュアだけが塗ってあった。その指が、俺の書いた式のすぐ横で止まる。ほとんど、触れそうな距離で。

俺の心臓は、勝手にうるさく鳴っていた。

こんな気持ち、先生に知られたら軽蔑される。俺は生徒で、先生は先生だ。それも、俺よりずっと大人で、頭がよくて、たぶん、恋人だっているような人だ。俺みたいな浪人生が、どうこう思っている相手じゃない。わかつている。わかつているのに――。

「遼くん」

「はい」

「顔、赤いよ。のぼせてない？大丈夫？」

先生が、心配そうに俺の顔を覗き込んだ。眼鏡越しの目が、すぐ近くにあった。

「だ、大丈夫です。暑いだけです」

「ほんと？無理しないでね」

先生は、ふっと笑って、自分の手の甲を、俺の額に当てた。ひんやりとした、やわらかい手のひら。その瞬間、俺の体温は、たぶん一気に上がった。

「うん……ちよつと熱い、かな。休憩しよつか」

先生は手を離して、椅子の背にもたれた。ふう、と息をつく。ブラウスの胸元が、呼吸に合わせて、静かに上下していた。俺は、その動きから目を逸らせなくて、逸らせない自分が、たまらなく嫌だった。

俺は、逃げるように立ち上がって、台所へ向かった。冷凍庫を開けると、母が買い置きしているアイスがある。棒アイスを二本取って、部屋に戻った。

「先生、これ。……冷たいの、どうぞ」

「わ、いいの……ありがとう。気が利くね、遼くん」

先生は、うれしそうに、アイスの袋を開けた。二人で、机に並んで、無言でアイスをかじる。開け放した窓の外で、蟬が鳴いている。軒先に吊るした風鈴が、時々、思い出したように、ちりん、と鳴った。扇風機が、首を振りながら、生ぬるい風を送ってくる。

なんてことのない、夏の午後だった。

でも、こういう時間が、俺は好きだった。先生と、ただ、同じ部屋で、同じアイスを食べている。それだけで、胸のなかで、あたたかくなる。この時間が、ずっと続けばいいのに、と思う。

「……子どもの頃、思い出すなあ」

アイスを食べながら、先生が、ぼつりと言った。

「夏休みの、宿題やっていると、おばあちゃんが、こうやってアイス持ってきてくれてね。縁側で、二人で食べたんだ。蟬の声、聞きながら」

「先生にも、そういう頃、あつたんですね」

「失礼な。私だって、昔は子どもだったの」

先生は、ふふ、と笑って、アイスの棒を、口にくわえた。その横顔が、夕日に照らされて、少しだけ、幼く見えた。いつもの、しっかりした先生じゃなくて、俺と同じ、ただの人間の顔。そういう表情を見られたことが、なんだか、特別な気がした。

「先生って」

気づいたら、口が勝手に動いていた。

「なあに？」

「……なんで、家庭教師、やってるんですか。院生って、忙しいのに」

先生は、少し驚いたように目を丸くして、それから、窓の外の蝉時雨に目をやった。

「うーん……最初はね、バイトのつもりだったの。奨学金の足しにしようって。でも、遼くんを教えるうちに、なんか、放っておけなくなっちゃって」

「放っておけない？」

「うん。この子、ほんととはできる子なのに、自分で自分に見切りつけてるなあって。もったいないなあって。だから……勝手にだけど、私、応援したくなっちゃったんだ。遼くんのこと」

先生は、こつちを向いて、はにかむように笑った。

その笑顔が、あんまりにも綺麗で、俺は、何も言えなくなった。

窓の外では、まだ蝉が鳴いている。夕方が近いのに、部屋の熱はちつとも引かない。

このとき俺は、まだ知らなかった。

この夏が終わるまでに、俺と詩織先生の関係が、どうしようもなく変わってしまうことを。先生の、あの手の冷たさも、ブラウスの下の体温も、全部、知ってしまうことになるなんて――。

――続きは、製品版でお楽しみください。